

Nikki Skillman: *The Lyric in the Age of the Brain*

Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 2016. 342pp.

平野順雄

本書は、1982年生まれの若い学者ニッキ・スキルマンによって書かれたアメリカ現代詩史である。対象とする詩人は6人。*Life Studies* (1959) で新境地を開拓した「告白派」の詩人Robert Lowell (1917-77) とリチウムの関係を論じる第1章に続き、第2章では、短い即興的な詩で知られるRobert Creeley (1926-2005) がLSD吸引により、外部世界に対する新しい感覚を得たことと、科学を好むA. R. Ammons (1926-2001) が地上の事物の営みの中に宇宙の秩序を見るようになったこととの共通点が論じられる。

第3章では、脳の働きに異常の生じたJames Merrill (1926-95) が、脳の異常を機知によって堂々とした詩に変換する様が語られる。第4章では、難解さをもって知られる「ニューヨーク派」詩人John Ashbery (1927-2017) の詩が「無頓着」を鍵語として、あざやかに解釈される。第5章では、Jorie Graham (1950-) の詩の語り手が陥る痛々しい神経の状態を手掛かりにして、この先、詩人はどのように生きるべきかが論じられる。

6人のうち、T. S. EliotやEzra Poundなどの盛期モダニストとの関連で論じられる者が一人もない点に注意して頂きたい。*The Waste Land* (1922) から100年の年月が経過しようとしている現在、(1) モダニズムとそれ以後ではなく、ロウエルとそれ以後を語ることが現在の詩を語ることであり、(2) 神話を用いて書くモダニストの叙事詩ではなく、病んだ脳の抒情を語ることが現在の詩を語ることだという認識によって、本書は貫かれている。

『脳時代の抒情詩』は、著者スキルマンが敬愛する上記6人の詩人たちの脳

に何が起っているのかを、生理学や神経病学などの成果を通して探り、複雑に絡み合う詩作と生の特異なあり方にメスを入れたものである。その際に「肉体化された精神」(the embodied mind) という概念を鍵にして著者が明らかにしようとするのは、詩人の脳が薬物その他の「物質」、或いは何らかの機能不全によって影響を受け、そうした制約の下で詩作する場合、抒情詩はどのようなものになるのかを描き出すことである。以下、6人の詩人を見る。

第1章 ロバート・ロウエルと性格の化学

「性格の化学」(chemistry of character) は、生涯精神的不安に悩まされた詩人ロウエルが、薬の力を借りて精神病から回復し、生き延びたことと関係する。彼はある時期から精神安定をもたらすリチウムを服用するようになり、途方もない恐怖感や自殺願望から逃れることができた。「性格の化学」とは薬品によって、不安定な性格が安定した性格に変わったことを指す。

Life Studies (1959), *For the Union Dead* (1964), *Near the Ocean* (1967), *Notebook, 1967-1968*, (1969, 1970) は、そうした不安定を抱えたまま書かれた作品であったから、「悪しき精神」(ill-spirit) を治療するために化学薬品を投与するとの説明を受けた時に、ロウエルはすぐに同意した(61)。リチウムがいかに魅力的に映ったかをスキルマンは以下のように記している。“Lithium salts offered an elegantly minimal, and even chemically simple, solution for what had seemed to be an impossible spiritual and psychological quandary” (61)。この薬品に頼ってロウエルは幾つもの詩を書き、詩中で様々な人物を演じたが、最終的に自己のアイデンティティを信じられなくなったとスキルマンは言う(86)。

第2章 生理学的思考：ロバート・クリーリーとA. R. アモンズ

クリーリーとアモンズは、ともに当時の生物学的物質主義(the biological materialism) と密接な関係にあった。彼等の思考をスキルマンは「生理学的思考(physiological thinking) と呼び一括りにして見せる。クリーリーは、LSDの

実験の吸引により新しい思想を抱くに至った。科学好きなアモンズは、自然の美に惹かれ、科学への信仰を、自己目的化した (87)。

クリーリーは、*For Love: Poems 1950-1960* (1962) までは、壊滅的な自意識と攻撃性で知られていた (91)。LSD服用実験によって、すべての物が繋がっているという感覚を持つようになり、二分法的思考の「外へ出た」とクリーリーは言う (94)。化学薬品がクリーリーを自然の中へ救い出したのだ (95)。あらゆるところに自己を見出すようになったクリーリーは、*Pieces* (1969) では、「境界で囲まれた抒情詩」の外へ決然と出ていく (97)。この時期から「考えること」がクリーリーの永遠の主題となる (101)。考えを言語の中で肉体化すること (thought embodied in language) が彼の大きな主題となったのである (103)。

アモンズは、精神と世界が同じ物質でできていると確信するようになっていた。自然 (身体) と言語の両面で体験を「加工処理する」力学を探ることが彼の喜びの源となった (104)。寓意詩“Turning a moment to say so long”の中で、語り手は「井戸に／飛び込む」。彼が飛びこんだ現実の井戸の底で、見出すのは、「超越ではなくごみ」だ (105-6)。現実から逃れようと夢見ながら、存在の意味を手放せない語り手を、アモンズは徹底的に罰する (106)。

とはいえ、アモンズは何度も「大地に別れを告げようとする」。それは肉体的なもの、感覚的なもの、日常的なものに対する心理的抵抗の表現である。精神性と具体的事物との関係を表わすアモンズの詩は *Expressions of Sea Level* (1964) である (106)。意識が生物学的行為に依存している事が強調されると、「精神の境界」は不明瞭になる。精神が現実を映し詩が精神を映す鏡の対称性により、世界と精神と詩の境界はぼやけてくる (107)。

アモンズには、自然は精神を外在化させたものであり、精神は自然を内在化させたものであるというロマン派的な前提がある (108)。*Tape for the Turn of the Year* (1965) に見られる実験は、思考を「記録する事」によって自然の意図を明らかにする試みである (108)。

“Corsons Inlet” (1965) でアモンズは、肉体組織の働きと、詩の働きの間に関係を見出し、地上のささやかな秩序に注目する。そこに宇宙の秩序が脈動していると信じるのだ (113)。以後、アモンズは精神と詩を、ともに生物学

的プロセスの物質的延長と見る (114)。

第3章 ジェイムズ・メリルと肉体化された記憶

「肉体化された記憶」(embodied memory) は、病気によって記憶の働きが損なわれた結果、記憶が頭脳ではなく、肉体の支配を受けている状態を指す言葉と解すこととする。

メリルはエイズから生じた合併症で1995年に他界したが、その10年前から病気の進行に伴って、記憶力は著しく損なわれていた。ただし、他界した年に出た詩集 *A Scattering of Salts* (1995) には、衰えることのない機知が窺える点を評価し、メリルは記憶違いを強調する時に一番堂々と精神の真実へ向かって進んで行く、と著者は言う(130)。メリルは記憶の女神の代わりに忘却の女神を、自分の芸術の究極の源としたのだ(135)。“Dead Center”という詩では、詩人のインク壺と忘却の暗い川が混じる(135)。過去をより完全に体験したいという欲求を、記憶が呼び覚ますが、記憶は、決してメリルの願いを満たせない(144)。メリルは、記憶の働きと文学行為を相関させる魅力的な方法を見出す(149)。

メリルには日常的な体験の魅力を、見事な表現によって伝える能力がある。その能力は、自己や肉体や歴史が忘却によって侵食される不安から読者を一瞬なりとも解放する。彼の機知は、無力から生じる審美的自由を肯定する方法なのだ、とスキルマンは言う(166-7)。

第4章 ジョン・アッシュベリーの無頓着

アッシュベリーの“unawareness,” “forgetfulness,” “narrowness of vision,” “distractibility,” “failures of comprehension”を総括するものとして、スキルマンは「無頓着」(mindlessness)という語を選んだと言う(169)。アッシュベリーは、若い時からすでに、精神活動は部分的にしか描けないという結論に達していた。「体験を体験すること」をテーマとするアッシュベリーは、あらゆる種類の精

神活動を否定する (169)。

“Instruction Manual”における焦点の推移や *The Tennis Court Oath* (1962) の言語の曖昧さをアッシュベリーは、肉体化した意識のせいにする (170)。しかし、彼は、超越的観点と物質的観点の両方から精神 (mind) を捉えようとしている、とスキルマンは言う (175)。

彼の詩のテーマが中年の後期になると“idea of mind”を映す詩から、“urgent mortal awareness”を描く詩へ、意識を描く詩から死を描く詩へと移って行くスキルマンは言う。55歳の時大病を患い手術を受けるが、歩行が困難になった。暗闇と場所の喪失、苦痛をアッシュベリーは体験した (196)。 *Flow Chart* (1991) は成熟した詩だが、死に取りつかれている (197)。また、われわれの立っている地面を表現してもいる (201)。彼の不滅の魂の運命は、聴衆の無頓着の中にある。しかし、他人がいかに冷たくとも、われわれは他人の中で生きることを学ばなければならない、と著者は指摘する (204)。

第5章 ジョリー・グレイアムと眼の倫理

グレイアムの詩は、詩の語り手の痛々しい神経の状態を夾雑物なしに読者に伝える。彼女は、人を縛る2つのもの、すなわち、科学がこの数十年間に描いてきた意識の地図と、膨大な宗教的歴史的芸術的内容で充満した精神の文学的隠喩、の制約を受けながら、世俗的な時代に崇高な意識を探求しようとする (206)。その際に眼は、受動的で物質的な物となり、グレイアムが望む無限に大きな、肉体のない、純粋に仮説的な物にはならない (209-10)。

グレイアムのアレゴリーは科学する心に組み込まれた盲目性を浮き彫りにする。“Subjectivity” (*Materialism*, 1993) では、蝶を観察する科学者が、記述を完璧なものにするために、辞書で蝶を潰し平たくしたいと願うことを知り、グレイアムは慄然とする。急ぐあまり蝶を標本として扱う科学者は、蝶の生命に対して盲目になるのだ (218-9)。

グレイアムは、神経科学者 Antonio Damasio と共通する課題に取り組み (219-20)、認知科学の下で抒情的主体が根絶される事態を Bruce Andrews, Charles

Bernsteinなどの言語詩人と共有し（224-5）、生態系の破壊を想像力の危機と捉え、抒情詩で歌うとされる（233）。

結論 脳時代の反＝抒情詩

5章までで論じられたのは、「脳」や「肉体化された」精神の危機を抒情詩の執筆によって乗り越えた「表現的」抒情詩人だった。結論部で扱うのは、解剖学の対象としての人間が作り出す意志も情緒もないデータから、精神の始まりへ至ろうとする詩人である。彼等は、主体性から神秘のヴェールを剥ぎ取る、反＝抒情詩の詩人である（240）。神経生物学の概念を詩的現前や、アートの方と限界に適用する、Tan Lin（b. 1957）、Julian Spahr（b. 1966）、David Buuck、Harryette Mullen（b. 1953）、Christian Bök（b. 1966）が特に興味深い（241）。

Linは、精神行為をしばしば生理学的に描写する。彼のコラージュ作品は、高揚した感情への懐疑を描く（249）。Juliana SpahrとDavid Buuckは抒情的感情に疑いを持ち、精神と環境の二項対立にも抵抗を覚える。二人の詩は、「反＝詩」（anti-poetry）と呼ばれる。

Harryette MullenとChristian Bökは、Lin、SpahrおよびBuuckと同じく、精神が物質によって規定されると考える（254-5）。MullenとBökは、それぞれの方法で自分に課した限界を乗り越えていく（259）。以下、内容の要約は省略するが、詩人の脳の活動が物質の限定を受けるという主張は結論部でも一貫している。また「反＝抒情詩」という枠組みで新しい詩人を捉えながら、抒情詩の生き延びる力を検証している点に安定感がある。

それにしても、大胆な本である。脳の状態を主軸にして抒情詩の系譜を辿る試みは、本書をもって嚆矢とする。詩を読むことと神経が平衡状態を保つこととの関係を説いたI. A. Richards、*Principles of Literary Criticism*（1924）に本書の淵源は求められるだろう。しかし、瞠目すべきは、スキルマンが最初の本で文学批評の新しい領野を開いたことである。